

## 家族の問題解決力を育成する際の看護者の姿勢

星川理恵<sup>1</sup>, 野嶋佐由美<sup>2</sup>, 長戸和子<sup>2</sup>

(2008年9月29日受付, 2008年12月15日受理)

Nurses' Attitudes on Ways to Enhance the Competence of Families to Solve Problems

Rie HOSHIKAWA<sup>1</sup>, Sayumi NOJIMA<sup>2</sup>, Kazuko NAGATO<sup>2</sup>

(Received : September 29, 2008, Accepted : December 15, 2008)

## 要 約

本研究では、看護者は家族の問題解決力を育成する際に、どのような姿勢で臨んでいるのかを明らかにすることを目的とした。看護師経験年数5年以上で、家族看護に関心のある看護者を対象に、高知女子大学看護学部看護研究倫理審査委員会の承認を受けて、対象者の自由意志を尊重して半構成的面接を行った。質的記述的研究方法を用いて分析した結果、5つの看護者の姿勢が抽出された。その結果、病者を内包する家族が、自ら変化を起こし家族全体で問題解決を進めていく、あるいは、家族全体が主体的に問題解決に取り組むことで家族の自負心を育成し、家族としての成長を遂げていくことができるようにするための看護支援の方向性が示唆された。家族の問題解決力を育成する際の看護者の姿勢として、家族をケアの対象として位置づけ、家族に対して看護専門職者としての責任を果たすことが必要であり、従来と異なる看護者自身の認識のパラダイムシフトが求められていると示唆された。

キーワード：家族の問題解決力、看護者の姿勢、家族看護

## Abstract

The purpose of this study was to clarify nurses' attitudes to enhance the competence of families to solve problems. Data were collected by semi-structured interviews from 11 expert nurses who were interested in family nursing. By qualitative descriptive analysis 5 attitudes of nurses were clarified. Nursing interventions to enhance the competence of families living with an ill person to solve problems were suggested; 1) support families to make changes and solve problems by themselves, 2) support families to address problems through independent participation of the family, 3) support families to enhance the pride of the family through the effort to solve problems. It is important for nurses to position not only the patients but also the families as targets of nursing care, and to perform their responsibility as professionals. In addition, paradigm shift is necessary for nurses.

Key words : the competence of families to solve problems, nurses' attitudes, family nursing

---

1 高知大学医学部附属病院 Kochi Medical School Hospital

2 高知女子大学看護学部 Kochi Women's University Faculty of Nursing

## I. はじめに

医療システムは、疾患中心に組織化されており、その文化に身をおく看護者も、必然的に病者の病气中心に組織化されている。看護者は、家族とは直接的な契約関係にはなく、診療報酬の面でも対象外であるのが現状である。そのような中でも、看護者は、家族をケアの対象としてとらえ、家族がよりよい健康的な生活を選択できるように支援している。例えば、渡辺<sup>1)</sup>は、家族は病气から影響を受けつつも、変化に対応し、安定状態を取り戻そうとする適応力があり、家族看護者は、その家族がもつ適応力が、よりよく発揮されるように援助することが求められていると述べている。小林<sup>2)</sup>は、変化を促進することが、家族看護者の役割であり、家族の変化が促進されるように、つまり家族が自ら変わるように、条件を整える役割があると述べている。

家族看護エンパワメントモデルでは、健康や課題に対して、家族自らが対処できるように支援する看護介入方法を説明している。さらに、家族の力を支える看護のあり方も注目され、看護介入方法の開発が試みられている。これらは、家族集団が有する力を発揮し、自ら問題解決を進めていくことができるように、看護援助を実践する方法を模索しているものと考えられる。

すなわち、看護者は家族をケアの対象として位置づけ、家族の問題解決力を育成する看護支援を実践していく際には、家族に専門職としての責任を果たしていくという認識のもと、従来とは異なる看護者の姿勢が求められるのである。看護者自身にパラダイムシフトが求められているとも言えよう。

家族をケアの対象に位置づけた看護者の姿勢に関する貴重な文献<sup>3)~6)</sup>や、患者と家族の認知的不協和がみられる際の看護者の姿勢については、既存の研究<sup>7)</sup>がみられた。しかし、家族の問題解決力を育成する際の看護者の姿勢に焦点をあてた看護研究は、いまだみられていない。

本研究では、看護者は、家族の問題解決力を育

成する際、どのような姿勢で臨んでいるかを明らかにする。本研究を行うことにより、家族をケアの対象と位置づけ、病者を内包する家族が、自ら変化を起こし家族全体で問題解決を進めていくこと、また、家族全体が、主体的に問題解決に取り組むことを通して、家族としての成長を遂げていくことができるように、看護専門職としての責任を、家族に対して果たしていくことが可能になると考えられる。

## II. 研究の方法と対象

### 1. 研究デザイン

本研究は、質的帰納的研究デザインである。

### 2. 用語の定義

家族の問題解決力とは、「家族一人ひとりが主体性をもち家族全体としてまとまって、家族内・外の資源を活用しながら、現実的な生活の中で、目的達成に向かって、家族なりの根拠をもって実現可能な方策を判断し実行して、家族生活を安定させていく力」と定義づけた。また、看護者の姿勢とは、「専門職としての信念や価値に基づいて形成された看護師のとらえや看護支援の基盤となる姿勢」と定義づけた。また、家族の問題解決力を育成するとは、「家族の問題解決力への尊重を基盤にして、病者を内包する家族が自ら変化を起こし、家族全体で問題解決を進めていくこと、また、家族全体が主体的に問題解決に取り組むことを通して、家族としての成長を遂げていくことができるように直接的・間接的にかかわること」と定義づけた。

### 3. 倫理的配慮

研究対象者に対しては、研究の主旨や方法、プライバシー保護、データは本研究以外に使用しないことを文書及び口頭で説明した。また、研究協力は、自由意志によるものであること、協力の有無により不利益が生じないこと、いつでも中止できることなどの権利を保証し、同意の得られた者

だけを対象とした。

研究対象者が語る患者・家族のプライバシーを保護するため、対象者には患者・家族の匿名性が守れるように配慮して話してもらった。面接内容を録音したMDや逐語録はIDをつけ、鍵のかかる場所に対象者の名簿とは別にして保管し、研究者以外はアクセスできないようにした。また、データの処理は研究者自らがを行い、対象者および対象者が語った患者・家族が特定されるような内容はデータとして使用する前に削除した。本研究は、高知女子大学看護学部看護研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

#### 4. 対象者

保健医療福祉機関で働く看護者経験年数5年以上の看護者で、家族看護に関心のある看護者、約1時間程度の面接を行うことができる看護者を対象とした。

#### 5. データ収集方法

家族の問題解決力を育成する際に重視する姿勢に関連する半構成的インタビューガイドを作成し、平成19年6月から11月にデータ収集を行った。尚、半構成的インタビューガイドの妥当性の検討と、面接技術及びデータ分析の信頼性確保のために、4回のプレテストを実施してインタビューガイドの洗練化を行った。

#### 6. データ分析方法

本研究では、得られたデータは、まず事例ごとにコード化し、その後、事例を越えて類似または共通のコードを分類してカテゴリー化した。データの分析は、家族看護領域の研究者らから継続的な指導を受けながら進め、研究の信頼性、妥当性の確保に努めた。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象者の概要

対象者は、保健医療福祉機関で働く臨床経験年

数7年から25年の11名の看護者で、うち7名は施設内看護者、4名は訪問看護者であった。対象者が語るケースは、在宅移行期にある家族や在宅での看取りに取り組む家族への看護実践であった。

#### 2. 看護者の姿勢

家族の問題解決力を育成する際の看護者の姿勢として、【家族を尊重する姿勢】【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】【自己を探求する姿勢】【看護の専門性を発揮する姿勢】【家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢】の5つの姿勢が抽出された（表1）。ここでは、以下、大カテゴリーを【 】、中カテゴリーを< >、定義を[ ]として表す。

##### 1) 家族を尊重する姿勢

【家族を尊重する姿勢】とは、[家族をケアの対象ととらえ、家族の主体性を尊重し家族生活を守る姿勢]のことであり、<家族の全体性をとらえかわる姿勢><家族の主体性を尊重する姿勢><家族を擁護する姿勢><家族生活を維持する姿勢>の4つが含まれていた。

看護者は、家族の問題解決力を支援する際に、「(ひとりの家族員に)過重をかけると、サポート体制が崩れそうな気がして」と、家族の全体を視野に入れ、主介護者だけでなく、他の家族員も含めた<家族の全体性をとらえかわる姿勢>をもっていた。

また、「お母さんの生きがいようになってしまったからね、お母さんがするためにどうするかを考えて、無理がいきそうなら少し声かけをしてと、一貫してましたね」と<家族の主体性を尊重する姿勢>で、看護者は、家族の力を確認した上で、家族が健康を保持しながら、主体的に最大限の力を発揮できるように見守り支えていた。

「この子が死なないようにっていうのがあればいいかなあって思ったので、このお母さんにしっかり教育して、ちゃんといろんなことができるよ

うにというところまでは望んでないんですけど」のように、看護者は、個々の家族員の能力や実行力、対処能力を適切に見極め、その家族にとって一番重要なことに照準をあててく家族を擁護する姿勢>でかかわっていた。

「生活状況を聞く限りでは、結構いろんなことを段取ってされている気がしたので、お家の中でもきっと段取ってやっているんだろうなあって」と、看護者は、退院後、家族が介護と生活を融合させて、どの程度、家族生活を維持することが可能であるかを、事前に吟味する<家族生活を維持する姿勢>をもっていた。

## 2) 家族の力を信じて成長を希求する姿勢

【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】とは、[家族が問題への取り組みを通して、家族としての絆を深め、家族なりのコントロール感を育んでいくことを希求する姿勢]のことである。その中には、<家族の力を育む姿勢><家族の強みを活かす姿勢><家族の絆を深める姿勢>の3つが含まれていた。

看護者は、「本当に杓子定規に全部繰り返しやっていると。でも、多分このお母さんにとってはそれが普通で、だから取ってそこを崩すことはない。ある程度時間をかける方が望ましい... 家族の力を活かすには、そのペースを活かす方が望ましいだろう」と、家族のペースを活かすことによって、家族の力を引き出そうと、<家族の力を育む姿勢>をもっていた。

あるいは、「良さはやっぱり活かしていかなければいけないと思うし、それから、マイナスに見えるものも本当にマイナスかどうかは、自分の価値判断だから、本当にマイナスなのか、マイナスでないのか、まあ、マイナスだけどプラスに転じるものなのかとか、そういうのは、よくよく考えないといかんですね」と、看護者は、家族の力をポジティブな側面からとらえ、強みを活かしていくことに価値をおく<家族の強みを活かす姿

勢>をもっていた。

子どもの病気という危機的な状況におかれている家族に対して、「お互いが気遣っているのに... ただ（看護者が）仲介としてそれを（お父さんに）伝えてあげたら、... そしたら、何日後かにお母さんの方から、お父さんが聞いてくれて嬉しかったというような話が面会の時に... お母さんがそこからすごい変わった」のように、家族の力を信じて<家族の絆を深める姿勢>をもっていた。

## 3) 自己を探究する姿勢

【自己を探究する姿勢】とは、[看護者自身が家族に真摯に向き合っていくために、自己を内省化する姿勢]のことであり、<自己の価値観を吟味し続ける姿勢><限界を見極める姿勢><自己研鑽する姿勢>の3つが含まれていた。

看護者は、家族の強みを引き出していくためにも、<自己の価値観を吟味し続ける姿勢>が見られ、「自分の枠ってこのぐらいしかないんですよね。だからね、その枠にはめようとするんじゃない... だから、なるべく自分の価値観だけで考えないようにしようと思ってますけどね。そうしないと、（家族の）良さが見えてこないし」と語っていた。

あるいは、「まずは、自分だけではこの方（病気の家族員）を退院に導く力は、持っていると思ってなかったの、まず主治医に相談して、そこからスタッフミーティングにかけました」のように、看護者は、自己の対処能力の限界を踏まえ、家族のニーズに応えるためには、どのようなサポートが必要かを適切に判断した上で、自分のできる<限界を見極める姿勢>をもっていた。

さらに、他の看護者の経験について「以前、何か退院（のケース）を抱えて、もめて悩んだ時があって、その看護師自身。その時の気づきを活かして、事実だけを伝えたって、意図的に」と語ったように、看護者は、常に自己の看護の振り返りから得た実践知を活かして、有効な看護ケアを探

求し続ける＜自己研鑽する姿勢＞をもっていた。

#### 4) 看護の専門性を発揮する姿勢

【看護の専門性を発揮する姿勢】とは、[専門的な視点から家族を多面的にとらえ続け、家族が主体的に問題を解決していくことができるように他職種と協働し、看護の独自の機能を発揮する姿勢]のことであり、＜看護の専門性から判断する姿勢＞＜他職種と協働する姿勢＞の2つが含まれていた。

「その時の状況とかを確認した上で、また次に柔軟に家族の境界を壊さずに、持ち味を活かしながら伸ばしていく、看護の方法を考えていく」と、看護者は＜看護の専門性から判断する姿勢＞をもって、限られた資源の中で、その家族の力を伸ばせるようにかかわっていた。

あるいは、「訪問看護師さんとかと情報交換して、また入院されてくるときには、また同じように情報交換して、退院する時にはフィードバックして…」と、病院と在宅との移行支援ネットワークを構築するなど、＜他職種と協働する姿勢＞をもちながら、家族の強みを活かしていくために、医療関係者との連携を計画してかかわっていた。

#### 5) 家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢

【家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢】とは、[家族と対等で信頼感を基盤とした援助関係をつくり、家族とともに考え、ともに働く姿勢]のことであり、＜中立性を保つ姿勢＞＜家族と関係性を築く姿勢＞＜家族と協働する姿勢＞の3つが含まれていた。

看護者は、「お母さん自身と家族全体を見ていくのは、私らも違うっていうか、（お母さんのペースを）待ってあげた方が、その家族、他の家族のペースにワーズって乗らんようにせないかんって」と、看護者は、安易に勢力のある他の家族のペースに乗ってしまうのではなく、＜中立性を保つ姿

勢＞に立って状況を把握し、家族にとってよりプラスの効果を生む方略を考えて、自らの行動を選択していた。

あるいは、「やっぱり先入観を持ってかかると、やっぱり見えるものも見えなくなって、うまくいくこともいなくなったりもあるだろうなあっていう思いがあって、私が真っ白な状態で、私とお母さんの関係をつくっていけば、病院の中のお母さんというのはまた別として、お母さんと私の関係を一からの状態として、私は関係づくりをしていこうと思った」と、看護者は、先入観を排除して家族と率直にコミュニケーションをとり、問題に対して協働していくことができるように＜家族と関係性を築く姿勢＞を大切にしていた。

ある看護者は、「こちらから、どうですか？どう準備されていますか？とかいう感じで、声をかけてやっていきましたけれども、意見を求めると、こうこうこういうふうにしようと思うとか、ああそれは考えてないのでどうしたらいいでしょう、と言ってこられたりとか、そこから一緒にするっていうのはできました」と語り、家族の問題解決力を維持させ、家族が目的を達成できるように＜家族と協働する姿勢＞でかかわっていた。

## IV. 考察

### 1. 家族の問題解決力を育成する看護者の姿勢の全体像

家族の問題解決力を育成する際の看護者の姿勢として、【家族を尊重する姿勢】【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】【自己を探究する姿勢】【看護の専門性を発揮する姿勢】【家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢】の5カテゴリーが抽出された。

家族の問題解決力を育成する際、看護者は、【家族を尊重する姿勢】【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】を基盤とし、【自己を探究する姿勢】【看護の専門性を発揮する姿勢】を保持することで、家族の抱える問題状況、個々の家族員と家族の全体性の両方の視点から、その家族の主

体性を見極め、家族の問題解決力を成長段階でとらえ、家族の状況に応じて家族の主体性を育み、あるいは、家族の強みを活かす方略を多角的に吟味することができていた。そして、【家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢】に立脚し、解決に向けて、家族と一緒に実現可能な方策を模索するとともに、家族の主体性を基軸とした家族の問題解決力を育成する看護支援を実践し、家族としての自負心の育成、あるいは、その家族の強みを活かして、家族が問題解決を進めていくことができるように、家族を継続的に支えていた。

## 2. 家族の問題解決に向けての家族の主体性の尊重

野嶋<sup>9)</sup>は、「家族は、自らの意思決定を行う権利を有しており、専門職者は家族が意思決定できるように支援する責務を有する」と述べており、家族への看護援助において、家族の主体性を尊重することの重要性を示唆している。

本研究の対象者は、家族との協働過程において、治療や療養に関するエビデンスに基づく専門的知識から、家族の現実認識を促し、そして実行へと繋げる看護支援を行っていた。しかし、決して家族に無理強いをすることはなく、まず、最初は、家族の明確な考えや意見を伝える力を引き出し、ともに納得し、現実的な折り合いがつく方向性を、家族と一緒に模索し続けて、お互いに根気よく話し合うことを大切にしていた。その結果、家族が納得できない場合には、改めて家族の希望する目的を達成するためには、専門職の立場から、どのように支援したらよいかを多角的に吟味し、継続的にかかわっていた。

つまり、本研究の対象者は、【家族を尊重する姿勢】【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】を基盤にして、家族の主体性を専門的な立場から見極め、家族と問題解決に向かって協働する過程で、家族の力を育み、あるいはその強みを活かし、問題解決に向かって、家族とともによりよい問題解決方法を模索し、家族の意思決定を尊重する方

向性で、看護支援を継続するという展開で、家族の主体性を尊重していたと考えられた。このような看護者の家族への看護支援の展開から、家族が生活を維持しながら、その家族のペースで主体的に問題解決を進めていくことができるように、家族の問題解決力を育成する看護支援を実践していくことの重要性が示唆された。

## 3. 家族とともに問題に向かいつつ、家族の自負心を育成する姿勢

本研究の対象者は、家族が問題解決の責任を引き受け、積極的にものごとに取り組んだり、介護をやり遂げる気持ちを強く持つなど、家族としての自負心をもち、問題解決に対して、家族として参画することを促していた。

看護者は、家族が問題に取り組む過程を通して、【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】をもち、【家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢】に基づいて、個々の家族員と家族集団の力量を視野に入れ、無理強いせず、家族が自信を持って対応できるように見守ることが重要である。

森下<sup>9)</sup>は、家族の“経験をパワーにする力”は、家族が生活に主体的に取り組む姿勢や、「自分たちにもできた」といった有能感や満足感、療養者とともに生活を継続する原動力となる動機づけに影響する強みとして重要であると述べている。

一方、家族全員が、最初から家族としての自負心を持って問題解決に参画しているわけではない。しかし、本研究の対象者の家族への看護支援の中に示されていたように、家族の中で、自らが行える役割が明確になり、その役割を確実にこなす自信を獲得していったことが、家族の自負心を育成していくこと、すなわち家族としての成長に繋がると考えられた。このような看護者の姿勢は、問題に取り組む協働過程において、家族が持つ力を発揮し、自ら変化していくことを支えていると考えられた。

#### 4. 専門職としての自覚から、家族のポジティブな側面を探求し光をあてる姿勢

看護者は、家族の問題への取り組みに関して、ややもすると否定的な側面にとらわれがちであるが、専門職者として、ポジティブな側面に光を当てる姿勢が求められる。

森下<sup>9)</sup>は、「療養者と生活をともにする家族は、その家族が自覚するしないにかかわらず、何らかの『家族の強み』を、家族の相互関係の中で育んでいる。家族の強みを動員・促進するためには、“力を備えた存在”として家族をとらえ、個別性・多様性を考慮しながら、家族自らが『家族の強み』を覚知し、獲得できるよう、そのプロセスを促すことが重要である」と述べている。

本研究の対象者は、家族の問題への取り組みについて、＜看護の専門性から判断する姿勢＞をもち、肯定的・否定的な側面の両方から客観的にとらえた上で、それを否定的な側面ではなく、むしろ家族の強みとしてとらえ直し、ポジティブな方向に活かしていけるものとして活用し、家族の問題解決力を育成する看護支援を実践し、家族の成長を促していた。

以上のことから、家族の問題解決力を育成する看護支援では、看護者が＜自己の価値観を吟味し続ける姿勢＞をもち、さまざまな情報を吟味し、＜看護の専門性から判断する姿勢＞に基づいて、ありのままの家族をとらえ、家族のポジティブな側面を支え続けていたことがわかった。このような看護者の姿勢は、問題に取り組む過程において、家族がもつ力を発揮し、自ら変化していくことを支えていると考えられた。

#### 5. 看護支援の自認と家族看護の評価の実施

本研究の対象者は、看護者としての姿勢をもって家族の問題解決力の育成にあたっていたが、その成果として、家族の問題解決力が強化されたとしても、それは、家族自らの成長であると評価し、それを家族にフィードバックはしていなかった。鈴木ら<sup>10)</sup>は、家族援助の評価は、単に家族の変化

を追い求めるのではなく、看護者自身が行った援助との関連において、家族が変化したことを適切に評価していくことが必要である。また、家族間の関係性の調整においても、家族の問題解決力を育成する看護支援を実践していることを自認し、家族に生じた問題に取り組む家族が、エンパワメントされる土壌を醸成していくことが今後の課題だと考えられた。

そのような状況の中で、日々の看護者の家族看護援助に対する努力と実践に裏づけられ、2008年4月専門看護師制度において、新たに家族支援専門看護師が特定分野として認定された。家族をケアの対象と位置づけ、家族のセルフケア機能の向上に向けて、看護専門職者としての責任を果たしていこうとする意思表示と考えられる。家族看護は、看護実践のなかに根を下ろしていく第一歩を踏み出したととらえられる。

#### V. 限界および課題

本研究の結果は、対象者が11名と少なかったこと、本研究における事例は、比較的家族の絆が深く、既に家族に解決すべき目的があって、問題解決をはかっていくモチベーションの高い事例がほとんどであったことから、結果に偏りがあったことは否めず、一般化することは難しい。また、本研究者は、支援の対象を家族一単位として意識して分析を重ねたが、実際の看護援助場面では、集団に対してかかわる場合や、家族員ひとりへの支援を通して家族システムにかかわる場合があると考えられ、このような看護援助場面の違いを考慮したカテゴリーの抽出は行っていないため、研究結果を一般化するには限界がある。今後は、解決すべき目的が定まっていない家族や、様々な看護支援の場面を通して、対象者を増やして洗練化を図るとともに、本研究結果を、看護実践に活用していくことが課題である。

#### VI. 結論

家族の問題解決力を育成する際の看護者の姿勢

として、【家族を尊重する姿勢】【家族の力を信じて成長を希求する姿勢】【自己を探究する姿勢】【看護の専門性を発揮する姿勢】【家族とパートナーシップを基盤に協働する姿勢】の5カテゴリーが抽出された。

これらの姿勢に基づいて、家族をケアの対象として位置づけ、病者を内包する家族が、自ら変化を起こし、家族全体で問題解決を進めていくこと、あるいは、家族全体が、主体的に問題解決に取り組むことで、家族の自負心を育成し、家族としての成長を遂げていくことができるようにするための看護支援の方向性が示唆された。家族の問題解決力を育成する看護支援を実践する際には、看護者は、家族に専門職としての責任を果たしていくという認識のもと、従来とは異なる看護者の姿勢が必要であり、看護者自身にパラダイムシフトが求められていることが示唆された。

#### <引用・参考文献>

- 1) 渡辺裕子：在宅看護論Ⅰ, p123, 日本看護協会出版会, 2001
- 2) 小林奈美：家族看護論, pp45-49, 医歯薬出版株式会社, 2006
- 3) Marilyn M.Friedman, R.N., Ph.D.監訳  
野嶋佐由美：家族看護学 理論とアセスメント, pp271-273, へるす出版, 2000
- 4) 野嶋佐由美, 中野綾美：家族エンパワーメントをもたらす看護実践, へるす出版, pp53-58, p84, p150, p166, 2005
- 5) 野嶋佐由美：家族看護学理論とアセスメント, へるす出版, p53, pp73-84, pp118-121, 2000
- 6) 鈴木和子：事例に学ぶ家族看護学 第2版, 廣川書店, 2002
- 7) 瓜生浩子, 野嶋佐由美：認知的不協和を抱えた家族に関わる際の看護者の姿勢, 高知女子大学看護学会誌, Vol.33, No.1, pp90-98, June, 2008
- 8) 野嶋佐由美, 渡辺裕子編集：家族看護, 日本看護協会出版会, p.7, pp28-35, Vol.01
- No.01, 2003
- 9) 森下幸子：家族の強み (Family Strengths) を支援する看護, 家族看護, Vol.05 No.01, pp37-44, 2007
- 10) 鈴木和子, 渡辺裕子：家族看護学 理論と実践第3版, p136, pp.144-145, p150, p172, 日本看護協会出版会, 2006
- 11) 長戸和子：家族の意思決定, 臨床看護, 25(12), pp1788-1793, 1999
- 12) 野嶋佐由美：家族の力を支える看護, 家族看護, 日本看護協会出版会, Vol.05 No.01, pp6-12, 2007
- 13) 野嶋佐由美, 渡辺裕子編集：家族看護, 日本看護協会出版会, Vol.02 No.01, 2004a
- 14) 野嶋佐由美, 渡辺裕子編集：家族看護, 日本看護協会出版会, Vol.02 No.02, 2004b
- 15) 野嶋佐由美, 渡辺裕子編集：家族看護, 日本看護協会出版会, Vol.5 No.01, 2007
- 16) 奥川幸子：身体知と言語, 中央法規, pp69-70, 2007
- 17) 奥川幸子：未知との遭遇, 三輪書店, 2004
- 18) 佐藤紀子：家族のケア力を高める看護援助に関する研究, 千葉看護会誌, Vol.10 No.1, pp1-8, 2004
- 19) 松寄くみ子：家族へのカウンセリング, 小児看護, 27(9), pp.1213-1217, 2004
- 20) ミルトン・メイヤロフ／田村真・向野宣之訳：ケアの本質, p58-59, 12版ゆみる出版, 2004
- 21) 武ユカリ：意思決定が難しい要因とそのときナースにできること, 看護学雑誌, 69(4), pp.360-365, 2005
- 22) 本道和子：退院に関する患者の主体性を支援する, 看護学雑誌, Vol.67.6, pp537-542, 2003
- 23) 本道和子：「退院調整」における看護の専門性, 看護技術, Vol.44No.7, pp19-23, 1998
- 24) 岩上真珠：子育て「問題」と家族の問題解決力, 児童心理, Vol.59. No12. pp11-17, 2005
- 25) 加納佳代子：それぞれの誇り, p222, 第3刷, ゆみる出版, 2004



- 26) 渡辺裕子：患者・家族とのパートナーシップ  
確立を阻害する要因と課題，家族看護，日本看護協会出版会，Vol.04 No.01, pp.14-19, 2006
- 27) 渡辺裕子，二瓶律子：退院に向けたプランの  
共有化，家族看護，日本看護協会出版会，  
Vol.02, No. 02, pp51-56, 2004
- 28) 渡辺裕子，鈴木和子：家族援助ができない理  
由，看護学雑誌，60／5, p.452-455, 1996
- 29) 渡辺裕子：家族の力を引き出すアプローチ，  
家族看護，Vol.2 No.1, pp62-65, 2004
- 30) 渡辺裕子：看護の立場からコラボレーション  
を考える，家族療法研究，第23巻第3号，2006
- 31) 渡辺裕子，鈴木和子，佐藤禮子ら：終末期に  
ある家族成員を含む家族の変化と家族対処，千  
葉大学看護学部紀要，Vol.17, 1995